



Title	<翻訳>『ペンサムの伝説その4』
Author(s)	ダイ, ママーング; 松木園, 久子
Citation	印度民俗研究. 2026, 24, p. 109-144
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104692
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ペンサムの伝説 その4』

ママーング・ダイ 著

松木園 久子 訳・註

村の娘たち

孤独と奇跡の血を引く私たち

女たちの言葉

女たちが列をなして、急な坂を上っていく。足取りはたしかで、ゆったりしたものだ。光が消えかかると労苦は目に見えず、尾根の上にある平らで安心な場所に向かって、女たちは事もなげに登っているかのように映る。

女たちは朝はずっと森にいて、木を切ったり、乾いた竹を割ったり、日差しと雨で乾燥した迷い枝を村へ持ち帰るために束ねる。日々欠かせないことだ。仕事はきついが、森の片づけをしながらでも、立ち止まったり、伸びをしたり、おしゃべりくらいはできるものだ。手強い山となると、言葉も出ない。全筋肉が、体中の震える全細胞が、勾配と格闘する労力に注がれるのだ。一步また一步と女たちは動き、口をつぐんで、頂上に到達する以外のことは考えない。そこに着けば、しばらくは背中から重い籠を引き剥がし、腰をかがめて息を切らしながら、破裂しそうな心臓が鎮まるのをゆっくりと待ち、そして村の門へと続く最後の傾斜に挑むのだ。

アールシーは、もう二度と頭を上げることはできない、と思った。頭に痣をつけ、体に固定しているトウのベルトを両手でつかんだまま、肩の筋肉が猫背のままで永久に固まりそうだ。振り返ることもできなかった。というのも、頭や顎の骨、靱帯や血管が張りつめていて、振り向こうとすれば首が折れるかもしれなかったから。彼女は重圧のために、泣きそうになった。

「もう、何てことよ。何でこんなに死ぬ思いをしなくちゃいけないの。これが人生なの。ほかに何もないの。なんでこんなことになるのよ」

乾いた、刺すような痛みが口のなかに生じて、上顎へと広がっていった。汗が顔をしたたり落ち、視界が奪われるのを感じた。それでもまだ

彼女は足を止めようとせず、長年の癖と習慣で、目をつぶって立ち上がっては、体力と意志を従わせて、登るのだった。

石だらけの道は直接ヤブゴ村へとつながっていて、それはトウの藪と竹の木立のなかでひと塊になっているドゥヤーングという村々の集団のなかでも、最初の村落だった。ほかの曲がりくねった小道はヤーラーンやシールームといった古い村と本来のドゥヤーング村をつないでいた。村同士が互いに入り込んでいて、小道を横切る木や岩や小川が緩やかな境界線になっていた。巨石が至るところにあり、その間で砂利やほこりの上を人は歩いていて、乾燥した季節には、このほこりが舞い上がり、細かい粉になって広がるので、村人の顔は真っ黒になり、その場所を呪うようになった。乾いた風が鶏舎をほこりだらけにし、棘のある小枝や虫の翅を餌入れに運び込むのだった。

あるとき、アールシーは花壇を作ろうとしたのだが、至るところで岩にぶち当たった。なんとか掘ろうとして別の場所を試したが、鶏の羽と乾いた泥が舞い上がり、土も水分も全くなかった。

「これが人の住む場所なの」と彼女は問いかけた。「なんで先祖はこの場所を選んだの。私らは厄介払いされて、世界のなかでもこんな荒れ果てた土地にいるのに決まってるわ！」

「そんなこと言ったって、しかたないじゃないか」とマーモ・ドゥーミーが答えた。「これが私らの世界なんだから」

乾燥しないときには、際限なく雨が降った。空には雷が轟き、バリバリという音がした。昼は水浸し、夜はびしょ濡れだった。女たちが竹を割るこの季節には、緑色の蛇が台所の火元へ滑り込んでくるのだった。どこからやって来るのかと、女たちは不思議がった。卵が孵り、長い緑色の成蛇が竹の稈で育つというのは、どんな魔術なのだろうか。

「ただそうなっているだけでしょ、夢のなかみたいに」とヤーヨーはある晩言った。

「そんなこと、あり得るの。きっと方法とか、理由とかあるはずよ」とミームームが割って入った。絶え間ない雨の一日の終わりに、薪がうまく燃えずに台所が煙りだらけになると、アールシーは我慢ならなかつ

た。「理由理由って、何の理由よ」と彼女は叫んだ。「どんな理由があって、私らは雨と泥とカビといっしょにここにいるのよ。言ってよ」

「そんなの、どうしようもないじゃない。私らはここにいる、ただそれだけ。どこに行こうって言うのよ」ミームームはこう言うと、不快そうに目を細めた。「それに、祭の時期なんだし、不幸じゃ死なないよ」

「分かったもんじゃないよ！」とアールシーは言い返した。「もちろん私らは不幸よ。私は不幸、不幸、不幸なのよ！」

彼女は一言言うたびに竹のトングで床を突き、さらにはそばで身を丸めていた犬の柔らかい腹を軽く叩いた。

「出てけ！出てけ！ごらんよ、幸せなのはこの子だけだよ、寝てばかりで」

犬は飛び上がり、怒った目で彼女を見つめた。

「出て行け、ボートゥーム！出てお行き！」彼女はこう言うと、笑いながら私の方を向いた。「ここってなんてところだろうね。あんたは出て行って、ツイてるよ。なんでしょっちゅう帰ってくるの」

それからこう言った。「私は来世は鳥に生まれるんだ」

「それで何するの」とミームームは笑った。

「そりゃ、たくさんあるよ。たとえば、歌ったり、飛んだり、ちゃんと生きることだね。英語をしゃべるとか」

今度はずっと黙っていたマーマー婆さんが、ピシャリと言い放った。

「ほう！こちらの鳥さんに聞いてみようじゃないか！ご用心あれ。女が賢くなりすぎたら、嫁のもらい手がなくなるからね」

マーマーは知り合ってからずっと、変わらなかった。亡くなった母が私をカレッジにやったときも、同じことを言った。

「あんたは役に立たないことを考えて、人生を棒に振るよ」と、今度はアールシーに言った。「何の役にも立たないことだよ。それに考える時間なんてどこにあるんだい。この一度の人生を、なんとか生きて行けたなら十分じゃないか。結婚しなきゃ。結婚のビーズと嫁や母ちゃんとして果たす役目が、女の本当の値打ちなんだよ」

アールシーは鼻で笑い、トングを薪のかけらに叩きつけると、炉のなかで火花が小さく火を噴いた。

あるとき、アールシーは学校を出て、町のカレッジに進もうと考えていたことがあった。しかし父親が亡くなって、この話は終わった。それから彼女は私にこう言った。「私ゴールドムに行くつもりよ。シールシーリーにはそこで店をやってる知り合いの男の子がいるんだ。うちの母さんに話を持ってきたのよ。私は受けるつもり。シールシーリーはひどい女だけど、私はその子に会ってみたの。あの子なら大丈夫だわ」



村の評議会の毎日の集まりで、男たちが裁きの場を開き、長々と事件を話し合っている一方で、マーマのような年長の女たちは日なだに腰を下ろし、しゃべっていた。腹のすわった、働き者で、率直な女たちだ。怒りを込めた矢のように言葉を発し、核心を突く。

母の死後、村で暮らすために戻ってきた年のことを私は思い出した。母からあまりに遠く離れてしまったことへの懺悔だった。その年、私は母と共に育ったこの女たちとしばしば同座して、悲しい話をしているときですら、その話に慰めを得ていた。

私はドゥーミーのことを覚えている。

「女の運命は女の運命だよ」と彼女は言い、ヤーヨーとマーマが賛成した。「そう！そのとおり！」

それは晩夏の穏やかな、蒸し暑い日のことだった。痩せた脚をしてベランダに座り、ドゥーミーは笑って、つばを吐いた。何ヶ月もの間病気をしていたのだった。「それで、どうやって暮らしていくもんかね」

「さあね」とヤーヨーは言った。

「どうもこうもないよ！知るもんかい」とマーマは言った。

私たちは皆、内緒の考えに没頭していた。それは、特にドゥーミーが問いかけるときには慎重に扱うべき話題だった。誰もが夫婦の間がそん

なにうまくいくものではないことは知っていた。賢者ドゥーミーは働きの者で、我慢強く、自分の人生のために戦っているところだった。

「これだけの年月が経って、子どもたちも大きくなったってときに、うちの人は別の嫁をもらうって決めたんだよ。恥はないのかね」

「男ってそういうもんだよ」とヤーヨーはいった。

「そろそろ死のうかってときにもう一回結婚しようって考えだすなんてね！」ドゥーミーの心は怒りで引き裂かれていた。不快そうに目を細めると、自分の脚をしっかりと抱えて、ヤーヨーの方をきつい視線で見つめた。泣く時期はもう過ぎていた。

「昼も夜も、昼も夜も、コソコソ出入りしてるんだよ。あたしあ子どもたちを産んでやったのに、しかも男の子だよ！なのにこのざま！お日さま！お月さま！この情けない男を目に留めてくださいまし、やってることを見てやってくださいまし」

「しっ！」ドゥーミーを守ろうとして、ヤーヨーは言った。「そんなこと、言い過ぎちゃいけないよ。おだまり。しーっ！」

「お聞き届けください。父なるお日さま！兄なるお日さま！母なる、姉なるお日さま！あの人をダメにしてやってください。頭に火が降り注ぎますように！」

女たちは不安げに体をもぞもぞさせていた。太陽と月に願い事をするのは大ごとだった。言葉には魔力があり、力強い言葉には力強い魔力が備わる。このあたりの村々では、女に触れても何のお咎めもなく男たちはのうのうと眠っていることを私たちは知っていた。誕生と生きることと死のことは定まってい、不変だ。それでもおかまいなしに女たちはいつも祈るのだ。「うちの人に害悪が訪れますように」と。

夏の最後の灼熱が雨を連れてきた。もう止まないのでは、というほど雨が降った。そして止んだときには、太陽は失った時間を埋め合わせるかのように、さらに明るく燃えあがった。セミが鳴き喚いた。巨大なイナゴは竹に体当たりし、私たちの持ちものに止まった。ドゥーミーの呪いはあまりに激しく、彼女の言葉は空気を毒し、私たちが皆病気になるかに思えた。

夜には彼女は火のそばで身じろぎもせず横たわり、虫の翅と、すすで黒くなった屋根の竹棒から垂れ下がっているほこりの筋を瞬きもせずに見つめていた。彼女の古いバッグが竹棒にかけられていた。「あれを取っておくれ」と彼女は言うのだった。

私たちは彼女の周りに座るものの、何を言えばいいのか分からなかった。私たちのうち誰かが網のバッグを渡すと、彼女は骨張った両手をバッグに突っ込み、古い缶を取り出した。きつく巻いた束からアヘンのかけらを取り出そうと、震える指で手探った。それを口元に運ぶとゆっくりと噛みしめ、助けを申し出る身振りに対しては、厳しい、感情のない視線で却下するのだった。とき折奇妙な叫び声が唇から漏れるのは、人生の本当の奥深さと広がりを示す光が目の前をちらっと通り過ぎたせいかなようだった。そして、ため息をついてはまた息をひそめるのだった。

ドゥーミーはその年の三月に亡くなった。私たちは死者のための通夜で一晩中火を焚いていたが、まったく暖かさはなかった。

「人生が幸せでないなら、どうしたらいいのか」と女たちは言った。

村一番の年長だった、バトール爺さんがドゥーミーのお悔やみに来ていた。ドゥーミーのそばに座り、泣いたとき、骨にひびが入ったような音がした。

「ドゥーミーと一緒に行ってしまえばよかったのに」と女たちのなかのひとりが言った。

「おまえさんで行くのを待っとるんじゃ」と老人は答え、まばたきをして涙をこらえると、大声で笑った。

アールシーはその頃はまだ小さな女の子だったが、私のそばにしゃがみ込んで言った。「人生ってこんなに短いのに、どうしてこんなに悲しいものなの」

空虚なひと月が石だらけの道でガラガラと音を立てて過ぎた。内なる嵐のせいで家は暗くなり、活力や希望、夢が吸い取られていくようだった。夕方には奥まったところから蛍が光を発し、ジャックフルーツの木

の周りで静かに光っていた。だまされたり、混乱を引き起こされる季節だった。私たちは水を運んだ。穀物を粉にした。薪を運びながら急な山を登ると、死ぬほど息が切れた。疲れた足取りで畑に行き、若い稲に米のペーストを塗るのだった。

「私たちに祝福を。食物をお恵みください。おお、偉大なる母よ！私たちにご加護を！」

こんなに短い言葉なのに、長々と祈りすぎているように私には思えた。

私は日々の日課の重荷に擦り切れ、何年も前に物足りなくなってしまった村での自分の過去にしがみつくのは間違いだという結論を出した。現実的になるべきだと決めた。つまり、出て行くべきだと。

しかし古い石の魅力は衰えるものではなかった。それは私がゴルドムの町に腰を下ろすと決めた年のことだった。それが最善の妥協案だった――母が埋葬されている村から陸路で半日の距離であり、私自身の人生に希望を持つためには十分離れていたからだ。

帰郷

私たちは大きな窓のそばに座っていた。私の友人はこう言った、「欲しいもの全部は手に入らなかったかもしれないけど、私たちはいろいろ学んだわ。人生が教えてくれたのよね。人生は卵みたいなものだわ」

穏やかな夕べで、薄暗く、静かだった。一番近くの山は緑色というよりは灰色で、迷子になった鳥が気の抜けたように飛んでいるのが見えた。私は彼女の乱れた髪と、小じわが深く刻まれ、ブルーのアイシャドウが痣のように入った黒い瞳を覚えている。彼女は笑い、そして呪った。

「それがどうだって言うの！気にすることないわ。運命なんてどっちにだって転ぶんだから。すぐに全部うまくいって、私たちはハッピーエンドを迎えるのよ、ね」

私たちが会うのは十二年ぶりで、母の古い家でワインとゴシップで再会を祝した。この年月が何を与え、奪っていったかはさておき、その夕

べ私たちはまるで何も変わっていないかのように感じていた。いまだにドゥヤーング村の女の子で、同じ交差点に立っている。私たちがかつて、大いなる明るい希望と大胆さを携えて、道を分かったところだ。途中の年月は驚くべきものだった。お互いの生活については遠くで聞いていて、歩んできた道に思いを馳せたものだ。こうしてそばに座り、顔をつきあわせて、始まりの場所に戻ってみると、離れていた年月を消し去る、ひとつの赤裸々な事実が私たちに共通していた。愛した男たちに愛されることはなかった、という。

もちろん私は自由気ままな生活をしていた。私には元来のイメージを捨て去ることができず、自分自身を変えることができなかった。優しさと光をもう一度見つけられる場所が、どこかにあるだろう。私は昔の家に、かつて私を引き留められず、未亡人になった母の元に帰ってきた。母は何もきかず、私の方は言葉少なに冷静さを決め込んで、私はうまくやっている、大丈夫だというところを見せようとした。実際たった一ヶ月のうちに私はすっかりなじんでいたのも、友人の訪問は私の平安を乱す侵略のようなものだった。

彼女は予告なしに、積載量をオーバーしたジープのタクシーでやってきた。道が途絶える、村から0.5キロのところでタクシーから降ろされた。村の若い男の子たちが家までバッグと箱を運ぶのを手伝ってくれたが、彼女はこの辺りが開発されていないこととあのぐずどもに払った金について文句を言っていた。部屋中に服を脱ぎ捨て、膨大な数の段ボール箱を足で片側に寄せた。啞然とさせられたのは、移動販売員に転身した彼女が持ち運んでいる荷物の量と、見知らぬ僻地の町へ夜行バスや壊れた車に乗って単身で移動していることだった。バンコクやボンベイといった大都市に飛行機で行き、旅行案内書で見つけたシングルルームを予約する。熱心に買い付けをしては、帰ってから税関と口論になったり、役人や中間業者という壁をブルドーザーよろしく突き崩すのだという。かつては美人だったのに。こんな事情を知ると、彼女のものすごい形相とあざけるような笑顔を見る前に人々は撤退した。そこで彼女がピ

ゴやゴルドムの町に現れると、女たちは新しい、色鮮やかな服や繊細な布地、化粧品やハーブの薬品に心を奪われるのだった。

「これでキラキラになりますよ」と彼女は言うのだった。こう言いながら若い頃の輝きをもう一度取り戻して、彼女自身も明るくなるようだった。今や体は拡大した。それをブカブカのトラックスーツで隠し、寝言を言うようになってしまった。

「問題は私たちがお人好しすぎるってことなのよ」彼女は言った。「何でも受け入れるのよね。そして愛情が過多——でも、仕方ないよね。あなたも私もそうなんだから。それでも時間はあるから、お金は稼げるし、いい暮らしもできる。働いて、前進するのみ。それで、どうだって。幸せな日々もきっとやって来るのよ」

「私にお金の話をしないでよ」と私は言った。「商売では私が絶望的だって知ってるでしょ」

「そうだったの！でもあなたはツイてるじゃない。お母さんがいるんだから。結局母親のようなものはほかにはないのよ！」彼女はため息をついて、首を振った。

そうだ、母親だ。母は長く、つらい夢を見た翌朝、驚いた、笑っているような声で私に事細かに話すことが何度もあった。落ち着かないから笑うのだと私は知っていた。私が川の水に巻き込まれているところもしばしば見たらしい。あるときは私が崖から飛び降り、石ころみたいに真っ逆さまに落ちていったのだと。

幸せになるためには女は生まれつき運がよくないといけない。私も迷信深いところがあるが、恐れているわけではない。やらなければいけないものは十分にある、と私は思った。本。絵。書くこと。しかし、母の考えは変わってしまった。何年も前に、母は私をはるか下流の町へやり、それから勉強のために遠くの町へまで行かせたのに、今ではこう言うのだ。「教育なんて何の値打ちもない。お前は知識はたくさん手に入れているのに、心は終わってる。どんな立派な見識を求めているの。そんなもの何の役にも立ちやしない。外へ出て、生きなさい！」こんなときには私は聞こえないふりをした。自分だけの世界で、庭や夜空に言葉を

探すのだった。もう少し時間をちょうだい、そうしたら自分で生き延びていくから、と自分自身に言ったものだった。

私の友人も、私が自分の殻に隠れてしまうのが気に入らないと言った。彼女自身は人前で戦ったし、負ける覚悟をしていた、ただしちゃんと戦った後でのことだ。「それがどうしたって言うの！」彼女は叫んだ。「私は稼いでいるし、お金は全部私のもの。少なくとも好きなことを言っていて、やっているわ、男が皆そうしてるようにね。かわいそうに両親はもう死んだけど、いい人だった。私には何も恥じることはないわ」そして、大声で笑いながら、こう付け加えるのだった。「目下、若干不調なだけ」

友人がいると母は喜んだ。二人には重なるところがあった。この世には縁起のいい人と悪い人がいて、この世で自分の場所を得るためには戦わなくてはいけない、と信じていた。会話と食べものを信じていた。台所は、とりわけ夜には活気のある、賑やかな場所になり、母はそのことに慰められていた。ひとりぼっちになることを恐れていて、私の人生は、自分とはかけ離れていて、未知のものだったので、不安になる瞬間が何度もあった。友人はその点でも母に似ていた。自分の部屋のドアを開け放ったままに置いて、私のドアが閉まっていると聞こえよがしに文句を言った。でも私も折れなかった。自分だけの空間を固守し、周囲を手探りしていたのだ。たまに安全だと感じる時には、昼となく夜となく、前触れなしに私の前に現れる、あるイメージに遭遇した。それは二体の肉体で、朝の日差しに照らされた鏡のように輝いていた。

男は女の体の線をたどっている。男は昔の彼女を知っている過去に嫉妬して怒り、涙を流す。女は男を永遠に愛すると誓う。男は女を試す。男は去り、戻ってくる。

「俺たちの話を書いてくれよ」と男は言う。「子どもを作ろう」

彼は去り、戻ってきた。年月が過ぎ去った。日差しは変わった。風景が変わった。影の位置を変えて、視界から消すことのできる夏は過ぎ去ってしまった。愛は十分ではなかった。

「あいつらにはずっと文句を言い続けないとだめ」と友人は言った。
「何一つ見逃さないで。事の真相まで掘り下げるのよ。うるさい女みたいにあいつの頭に取り付いてやらなきゃ。そのうちあなたも分かるわ。泣いちゃだめ。はっきり言うよ！あいつの人生を散々にするためだけにでも、ふんばればよかったのに。ハハ！」

私も思わず笑ってしまった。友人も顔を伏せて、こらえきれずに笑っていた。

「あなたはどうかの」私は言った。「聞かせてよ」

「あいつ、うそをついてたの」友人はすぐに話し始めた。「私の人生、食べ物にされちゃったわ。私、必死で働いたのよ。私たち二人のために働いて、赤ちゃんができるように祈ってたけど、向こうにはほかの手があったのね。今は若い女とどこかで暮らしてるわ。もう長い間口もきいてない」

「いつから」

「私が気づいて、ケンカになって、頭を殴ってやってから」

友人はまた笑い出した。私は急に頭に痛みを感じて、たじろいだ。

「仕方ないじゃない。私には信じるか信じないかの権利しかなかったから、信じる方を選んだの。間違いだったけど——それからどうしたって。あいつにズバリ聞いてみたら、顔つきでバレたの。一番よね、ズバツと聞くのが。それから私、大声で言ってやったのよ。『そんなのうまく行くわけない』って。向こうは、『うまくは行かないかもしれないけど、悪くもならない』だって。それで殴らずにはいられなくなって。ひどい取っ組み合いになったけど、その後、あいつのやったことなんて、どうでもよくなっちゃったのよ」

その年の冬は長く、残酷なものだった。幽霊や靈魂は川岸を歩いたり、減少し続ける森のなかから妬ましそうに見ていた。すぐそばでしつこくつきまとうので、構わずにいることは無理だった。ある若い娘が川岸の温まった石の上で休んでいる間に眠ってしまったことがあった。私たちのところでは、女が小川や川のそばで長居するのは重大な過失だと考え

られている。というのも夜は奇妙な夢とさまよう靈魂がひっきりなしに訪れるからだ。翌日一日中、その娘は激しい腹痛を訴えていた。何か起きたのだと、察しのいい年寄りの女たちは悪魔払いの儀式の準備を始めた。

シャーマンが呼ばれ、靈魂たちに何がほしいのか話してくれるように呼びかける、形式通りの詠唱で儀式は始まった。それは駆け引き、すなわち交換の話し合いだった。「鶏をつぶして、ごちそうを用意しましょう。石にワインをかけて、風に血とショウガの匂いをさせましょう。禁忌を守り、平和を保ちましょう」

私の母はこのようなことに詳しかった。こんな場合、大騒ぎをするべきなのだと母は言った。人々が集まって、大きな音を立てていないと、正気を奪われるのだ。母は寝ずの番をし、私たちは偉大なシャーマンがつぶやき、歌い、靈魂の世界へ入っていくのを見守っていた。そして、シャーマンを介して、集まった親戚はその娘の叫びを聞いた。そのすすり泣きは峡谷を吹き下ろす風の耳障りな音に似ていた。

「私は緑色の貯水池で溺れたんです。お腹の子も一緒に死んでしまったの。去年の夏、そこで私は死にました。ああ、助けてください！ 生きたいんです！ 命を返してほしい！ 生きたいんです！」

私たち皆とりつかれている、と私は思った。道が交差し、星がぶつかり、私たちは走り抜けたというのに、まだ肩越しに振り返り続けてしまう。それは、予期せぬ衝突から出たかけらが今も私たちを捕らえているからだ。私たち皆が命を取り返したがつているのだ。

辛抱強く、型にはまった生活を私は続けていた。自分の考えに浸っていたので、あひるがまた卵を産んでいることにも、それを母が見守り、雛が孵るのを待ちわびていることにも、ほとんど気がつかなかった。絶え間ない霧雨は村を霧のなかに包みこみ、母が幹や芽や球根を植えたり、植え替えたりして、庭で動いている姿を私はよく目にしていた。

「ずぶ濡れになるわよ」と私は大声で叫ぶこともあった。

「今やらないと手遅れになっちゃうんだよ」と母はおどけたように返事をし、古いスカートとおなじみのブラウスに包まれた母の大きな図体が庭を動き回るのを私は見ているのだった。

ある日、母は私に足がしびれると言った。

「しびれるってどういうこと」

「冷たくて、チクチクするんだよ」と母は答えた。

母はシーツから足を押し出し、私は少し触れてみた。私たちは感情を外に出す家族ではなかった。心ならずも近づいたせいで私の心臓は嫌な動悸をうち、どうすればいいのか分からなくなってしまった。母は私の戸惑いに気づいたようで、「メイドに湯たんぽを一杯にしてくるように言っただろう。そしたら、少しマッサージもしてくれるだろうし、楽になると思うわ」

その夜、私は母と一緒に座っていた。部屋を見渡し、古い写真と私たちが一緒に微笑んでいるのを見て、私はショックを受けた。ある写真では、一人っ子の私が父と母に腕を回し、学校のブレザーに母の古いブローチを着けていた。私は息が詰まり、泣きそうになって、何度も部屋を出た。メイドと母はしばらく話を続けていたが、母が眠りに落ちると、メイドは私に、母の呼吸がかなり弱まっていると合図を送った。私は初めて恐怖を感じ、母をじっと見つめた。メイドは母の胸の上に手を置き、私にも同じことをするように身振りをした。奇妙な感覚だった。今頃になって母の顔を見つめ、頬に深い皺が入っていることや年をとって薄いまぶたが引っ張られていることに気づいた。小鼻のすぐ脇に小さな引っかき傷があり、多分バラの茂みでついたものだった。

その夜私は夢でバラを見ていて、正確にはいつ母を失ったのか分からなかった。眠っている間に静かにそっと息を引き取ったのだ。私は目覚めると、これまでに経験したことのない後悔とパニックで恐怖に陥った。人々がなだれ込んできた。母を知り、愛してくれた人々、年老いたおばたち、年を取ったマーマーとヤーヨーとロシーたちだった。私を抱きしめ、母がどんなに素晴らしい女の人だったかを語ってくれた。どんなに立派に義務を果たしたか。どんなに私を愛し、心配していたかを。

痛みを説明するのはむずかしい。いつも私は沈黙を選び、無関心を装うことでやり過ごしてきた。友人の言葉がよみがえってきた。あなたはツイてるじゃない。お母さんがいるんだから、と彼女は言った。母親のような人はほかにいない。かわいそうなお母さん！母の私への思いやりは、効力が消えないお守りみたいだと分かっていたのに、自分のペースが狂うからとあまりにもしょっちゅうはねのけてきた。母の視線から自分を守るために、けっして母が理解したり読んだりしない言葉や本を使った。それでも我慢強く、愛情をこめて、私を見守り続けてくれた。私が大きくなり、母から離れて幸せを求めるようになる前に話してくれた、創造の物語や村やみんなの話を覚えていた。うちでの物静かな日々の仕事、晩に灯される火を覚えていた。夜ごと母が口を覆って咳をしていたことを覚えていた。自分の冷たさに今さらながら呆然としてしまう。私は何をやっていたんだろう。どこにいたんだろう。おばが私の方を向いたとき、私は崩れて泣き出した。生まれて初めて、母に触れ、抱きしめた。柔らかい、たるんだ頬に触れ、命の消えた両手を握りしめた。死にたいと思った。

「おいで」とおばは囁いた。「お母さんに涙がかからないようにね」

夢のなかにいるように、儀式は過ぎた。お悔やみの歌が歌われ、母の子ども時代が回想された。旧友たちが母のそばに座り、自分たちの内輪で、または母に向かって、語っていた。よかった頃を覚えていてと母に呼びかけ、長女として、妻そして母として、どんなに家庭に尽くしたことかと言った。「お宅にはいつも食べ物があったわね」と母に話しかけた。魂があちらに着いたら先祖が出迎えに来てくれて、大きな木の下で清浄な魂が聖なる葉のシャワーを浴びることを、彼らは母に思い出させていた。

母は頭を西に向けて埋葬された、というのも魂が目覚めたときに東を向いて起き、太陽の家へと歩み入れるようにするためだった。

長いお通夜のおかげで私は落ち着いた。悲しみを外に表し、人と分かち合うことで、とても慰められた。私の友人はずっと私と一緒にいてくれた。今度は荷物は持ってこなかった。人生は卵みたいなものだ、と彼

女は言ったことがある。毎秒が知らないものだし、経験がすべてというわけでもない。念入りに用意をしても、人生にはとんでもない驚きが待っていて、また一からやり直し、というわけだ。私は友人に残ってほしいとお願いした。彼女は来客の対応をし、母の庭を歩くのに付き合ってくれた。風は強く、私たちのむき出しの足首に絡みついた。花壇の周りを歩いているとき、風で吹き上がった髪を、友人は無造作に押さえつけていた。今や庭を歩き回することは地雷の上を歩き回るのに似ていた。至るところに何がしかが植えられていたのだ。動くたびに、驚いて一步下がらずにいるのはほとんど無理だった。鋭い、緑の葉がそここから顔を出していた。弱々しい小枝が急に目覚めたようになり、バラは雨風に傷められていたのに、これまでになく長く広く伸びていた。

生きなさい、と母が言ったことがあった。厳しく、もの悲しい山々の連なりを見つめ、そして月の赤ん坊たちを夢見ながら、母はいつも私と共にあることを私は知っていた。土は柔らかく、穴ぼこだった。私は、百合を植えずにいるのは、惜しいと分かっていた。土がこんなに肥えているのに花が咲かないのは、まるで罪だ言わんばかりだった。

リバー・ウーマン

「古い家族写真はありませんか」とモナがロシーに尋ねた。「お舅さんかご両親のお写真とか、何か昔のものはありますか」

モナはホクソの一家と友人になっていた。モナはゴルダムにいる私を訪ねるたびに村に来たが、今ではそれが一年に三、四回になっていた。

「そんなものはないわよ」と笑いながらロシーはモナに言った。「いつも聞いているような話しかないし、それもたいていは旦那が作ったものだろうしね！」

それでもロシーは家の片隅に行き、古いトランクから服とビスケットの缶を引っ張り出し始めた。缶のうちひとつはやっとのことで蓋が開き、ロシーは中身を引っ掻き回した。そしてしわになったはがき大のセピア色の写真を持って戻ってきた。

写真には、若い娘が一人と制服姿の美男子がいた。男はわずかに娘の方に傾いて、カメラに向かって微笑んでいた。すぐに友人と私は、そこに写っているのが永遠の若さを持つ女性なのだと悟った。キラキラした黒い瞳に、長い髪を後ろにまとめ、簡素なお団子にしていた。写真は伝説の美女ヌムであり、ロシーの母だったが、もっとよく覚えられているのはイギリス人将校と恋に落ちた女としてだった。

よくぞこんな写真を撮ったのは誰か、そしてよくぞ将校のバンガローの前でポーズをとったものだ、あるいはあえてそうしたのか、と私は不思議に思った。ひどいゴシップと驚愕の目にさらされても、白人からの注目を受け入れ、お返しに愛を与えるなんて、ヌムという人はきっと勇気ある人にちがいない。ラークトは、当時喜んで白人たちに雇われていた自分の父が、村で唯一の自転車に乗って政府の郵便物を配達しながら、何度もヌムがこっそりサーヒブの事務所へ出入りしていたのを見たが、一度も声をかけなかった、とよく言っていたのを覚えていた。たった一度父はヌムに向かって短く頷いたが、すぐに目をそらされたそうだった。

ヌムを知る人々は、態度は物静かだったが、予想できない、衝動的なところがあったと言った。「まるで川のような」と。



世界中が戦時下の頃だった。こんな戦争は以前にも一度起きていたが、それはシアーング谷に大量の白人兵士がやって来るようなものではなかった。今では彼らは至るところにいるかのようだった。というのも、はるか東方で日本軍と戦っている最中であり、ホクソやラークトの父親たちもそこへ行っていた。

もちろん、その頃にはその地方で白人のサーヒブは知らない人ではなくなっていた。コムシング事件に続く1912年のアボル遠征からこの方、シアーング谷全体が探索のために開放され、辺境の山々にある数多くの村が英国による行政管理の下で売り払われた。銃火で村々が燃え上がる

と、長老たちはボロボロの古新聞を振って、敗北を認めた。戦争の始まる数年前、イギリス人はドゥヤーングの村々と土地の交渉を行ってから、ピゴの川岸に常設の野営地を建てていた。村人は1平方マイルの土地に駐在官と医者一人、警官一人のための住宅を建設することに同意した。

今やその区画全体が自由貿易区となり、土地と河川の護衛隊、役人、貿易商、ポーターらが四方八方で活動していた。村人は山頂からピゴの明かりを見ると、新しいことを知りたい、あるいは少なくとも精査して、どういうことなのかを分かりたいという欲求に駆られた。皆がこの新しい目的地に群がり、今ではそこは権力の座として認識されるようになってい

る。ある日、ドゥヤーングの若い女の子の一団がピゴの市場に向かって歩いていた。オレンジの季節で、深い緑色の木には実がたわわになっていた。この地域のどの村も、一番甘くて、大きいオレンジを誇っていて、女の子たちは果実を積んだ籠を運んでいた。もし全部売れたら、灯油と糖蜜、できれば葉タバコを一束買うつもりだった。または硬貨を胴着のなかにたくしこんで、帰るつもりだった。

突然ほこりが立ち込めて、女の子たちは皆立ち止まった。

「まァ！白人だわ！」

「しー！行かせようよ」

女の子たちは籠の持ち手をギュッとつかんで、ほこりにまみれた足下に視線を落としていた。オリーブグリーンのジープが近づいてきて、女の子たちのそばを通り過ぎるときにスピードを落としたようだった。ヌヌムは目を上げると、運転している若い男と視線がぶつかった。二人は互いに見つめ合った。それから車はよろめきながら、川の方へと急発車した。ヤサームとヌヤーングはすぐにしゃべり始めた。

「あらあ……止まるんじゃないかと思ったわ！」

「そんな風だったわよね！」

「何のために止まろうとしたんだろう」

「オレンジを買ってくれたかもよ」

女の子たちはさらに一時間半しっかりと足取りで歩き、ピゴへ着くと、大きな木の下に場所をとった。そこには近郊の村から来たほかの女たちがすでに腰を下ろしていた。ヌヌムは自分の場所を選ぶと、オレンジを小さな、輝く山になるよう陳列した。小銭入れを用意した。駝担ぎに持ち歩いている、編んでこさえたものだ。

市場は円形のデザインに配置されていて、前面が木でできている、米や布、ビーズにタバコや塩を売る店があった。店をやっているのはアーイーニングという平地の民で、皆土地の言葉を話すことができた。それに村人が値切れば、愛想よく、負けてくれる限りは、こんな風に彼らがやってきて商売をしても嫌がる者は誰もいなかった。この円の真ん中に古い巨木が立っていて、緑色の傘のようにトタン屋根の上に枝を広げていた。短い舗道が通っている、木の巨大な根元が、川岸に居を構える部族が腰を下ろして、売りたいものを並べることが許されている場所だった。それは、食べものや野菜、竹かご、食用の虫、熱帯樹の根、薬草、ショウガ、それに地元の薬などのごたまぜだった。女のなかには、織布や熱帯樹のより糸まで売る者もいて、鮮やかな色を風にはためかせながら、永遠にもつ品だよと大声で叫んでいた。

市場の正面入口での小さな騒動に気づいたとき、ヌヌムはすでにオレンジをふた山売っていた。見ると、周り中の人々が座ったまま背を伸ばし、首を伸ばしていた。それからジープがちらりと見え、人々は道を空けていた。ジープはゆっくりと市場を回って、ほこりっぽい小さなパン屋の脇で停まった。男が飛び降りると、ヌヌムはビクッとした。

ヤサームは肩をつついた。「さっき見たばかりの白人じゃない」

「そうよ！あの人だわ！気づかせて、オレンジを全部買う気にさせようよ」

「ばかなこと言わないで」とヌヌムは言ったが、火照るのを感じ、友人の盛り上りを煩わしく思った。

「どうしてよ。私たちがこんなところまで重い荷物を運ばなきゃならないのを、あの人見てたんだから」ヌヤーンは言い張った。実際この

ときヌヤーンは飛び上がって、男に手を振ろうとしていたのだが、ちょうどその瞬間に男は背を向けてしまっていた。

人でごった返していた。売り物のキノコの値段を聞きに来た人に、ヤサームは指を広げて、数え始めた。あちこちで活気よく売買する声が上がっていた。赤ん坊をおぶった女たちは立ち上がって、もう一眠りさせようと揺らしているかと思えば、ほかの子供たちには釣り銭をもっと早く数えろとどなり続けていた。

「ええっと……オ、レン、ジ……おいしいのかい」

ヌヌムは見上げた。若い白人が目の前に立っていて、果実を指さしていた。ヌヌムは頷いた。男は微笑んで、そばにしゃがみ込んだ。オレンジをひとつ持ち上げると、まるで初めて見るかのように手くるくる回して見ていた。

「味見して」とヌヌムはオレンジと自分の口を指さしながら、合図した。男が皮をむき始めると、ヌヌムは面白がって見つめていた。

「私のも買ってと言ってよ！」ヤサームは小声でせかして、男が気づくと、自分のオレンジを指で突ついた。

白人の男は笑って食べ始めると、気に入ったと伝えるために頷いた。ほかに男が二人そばに立っていた。カーキ色の半ズボンをはき、ベルトにはピストルが付いていた。ほかの国から来た部族民だとヌヌムは思ったが、彼らの顔は無表情で、よそ者という感じがした。白人が何か言うと、二人は走って車へ戻った。

「君の村はどこなの」川や山の方に向かって身振りを交えて、男はヌヌムに尋ねた。

ヌヌムは笑って、山の方に向かって腕を振った。彼女の村は木々に隠れていて、鉄橋の架かった小川によってこの町からも切り離されていた。ドゥーイング氏族の本拠地で、最小の村のひとつとされていた。というのも、それは山の中腹まで登ったところにあり、渦巻きながら、轟音を立てて峡谷に吹き下ろす風から守られていたのだ。夏は涼しく、ジャックフルーツの木が陰を作ってくれた。でもどうやってこれだけのことを男に伝えればいいのかだろう。

「あのう……ええっと……」ヤサームとヌヤーングは恥ずかしそうに口ごもり、クスクスと笑っていた。

「僕の名前はデー、ビッ、ド」と男は言い、自分を指さした。

ヌヌムは両手で顔を隠してしまいたいと思った。外国人の名前を聞くのはおかしい感じがしたし、口に出してみたいとは思わなかった。自分の名前を知らせたいとも思わなかった。

護衛の二人が大きなズック袋を持って戻ると、ヤサームとヌヤーングは手早くオレンジをすくい上げて、山積みには袋に入れた。興奮して正確な量が分からなくなっていたが、ほとんど関係なかった。キラキラした硬貨をひとつかみ、護衛が彼女らの前に置いたからだ。ヌヌムが自分の取り分を小さな袋にしまい込むのを白人の男は待っていた。そしてショウガの小さなかけらを拾い上げると、いたずらっぽくヌヌムを見ながら、ポンッとポケットに入れると立ち去った。後ろには、オレンジの一杯入った袋を引きずっている護衛をしたがえて。

「ねえ！あの何人何であんなことしたの」とヌヤーングが大声を上げた。

ショウガには護身の役割がある。野生のショウガは邪悪な靈魂に対する薬にもなる。ひとかけらを病よけに小さな子どもの首に結わえたり、旅するときには、ただの習慣にすぎないのだが、常に身につけるものだった。

「じゃあ、私たちのならわしを知ってるにちがいないわね」とヌヤーングは続けた。

「この人たちって、何でも知ってるものね！」

ヌヌムはほとんど聞いていなかった。男がショウガをポケットに入れたとき、自分に投げかけた視線について考えていた。変な人。どうしてあんなことしたのだろう。同時に彼がやって来たことに動揺し、少し戸惑いも感じていた。市場の皆が二人の方を見ていた。いつもの商売だというふりをしなければならなかったが、イギリス人将校が歩いて市場に入り込み、部族の女とオレンジを食べ始めるなんて前代未聞だということとは知っていた。

ヌヌムはヤーラン村の古参の村長ソーゴングの一粒種だった。当時十九才だったというのは推測である。その頃は誕生と死亡の公的な記録というものがなかったからだ。確認できるのは、正式な学校への入学許可が得られた、その地域ではわずかな女性のひとりだったということだ。

数年前、父は娘を川向こうの町に開校した初めての女子向けミッションスクールにやることを思いついた。娘にはどこの息子とも同じことができる能力があると考えていたので、読み書きを学び、名を上げることが彼は期待した。ヌヌムにとってはそれは想像もできない方向だった。村の学校に行ったり行かなかったりという幸せな日々から投げ込まれた、冷たく閉ざされた空間を彼女は嫌悪した。教科書も祈とう書も、花柄のドレスを着た、唇の薄い先生も嫌いで、とりわけ女の子が一同に揃って死んだ魚の長い列のように眠る部屋が一番嫌いだった。一年後、病気にかかり、なかなか治らなかった。父が諦めて、家に連れ帰ってくれたときは、彼女にとっての大勝利だった。渡し船が上流へ引かれていくと、再び山に向かい、川のそよ風を感じ、そしてたちどころに回復したのだった。

自分が求めていたのは自由だけだった、と後に彼女は友人に話した。学校で一番恐かったことは、魂が縮こまったり、永遠に変えられてしまったりすること、そしてもう二度と川を見ることができないことだった。

今、ピゴの市場からの帰り道、ヌヌムはミッションスクールの寮母の明るい色の髪と青い瞳を思い出していた。あの白人の男も同じ色の髪と瞳だった。でも彼の目には微笑みがあり、それにどこか向こう見ずでかつやさしいところがうかがえた。

その晩、ジャックフルーツの樹液の濃厚な、甘い匂いのために空気は重かった。ヌヌムは晩ご飯を作る間、ずっと鼻歌を歌っていた。父は村のほかの男たちとベランダに座り、母は火をかき立てていた。

「うわぁ！こりゃ何だ！」と父は言った。刻んだ卵におろしたショウガを和えた料理を一口ずつとライスビールをヌヌムが運んできたのだっ

た。そして嬉しそうに笑った。「私のお手製よ」と言い、ビールのマグを配りながら、その一つひとつの脇に卵ショウガを少量ずつ置いた。父が家にいるめったにない日のことだった。ほとんどの日、ソーゴングは毎朝草を食みに送り出されるミートゥーン牛を追って、森を何マイルも歩くのだった。あるいは、途中であきらめ、友人と一晩中飲み明かすこともあった。彼は弁が立つことで有名で、クバーングと呼ばれる会議において何度も言葉の力で個人あるいは村同士の調停をしてきた。しかしそれ以上に、心根のよい、正直者だと広く認められていた。唯一の弱点は酒だった。

「ほら、そこにお父さんがいるよ、ごらん！」と母は苛立って不満そうに言い、決まってヌヌムは、白いショールを羽織った父が、酔って上機嫌になって、村の石について協議している姿を見つけるのだった。

「昔は本当に生活が厳しくてな」と父は言ったものだ。「わしらは岩の間から這って出ると、お互いに呼び合ったもんだ。荒野でひとりぼっちになるのは恐ろしいからな。今じゃ平地のアーイーングたちに土地を奪われて、わしらは巨石と石ころのなかに戻るはめになった。くそ！それでもこんな石ころのなかから必ず抜け出す道を見つけてやるぞ。どれをとっても、形も大きさも手触りも知り尽くしとるんじゃ」そして、父は実際に身をかがめて、愛おしそうに石を軽く叩くのだった。

父はまた岩や石について語ろうとしていて、そして男たちもまた互いにつぶやいたり、相談し合ったりしながら夜明けまで起きていることをヌヌムは知っていた。母はすでに白い手織りの布にくるまって蚕のように、部屋の片隅で眠りに落ちていた。ヌヌムはしばらく座っていると、夕べと両親、村と全ての友人そして自分の人生がこの瞬間言葉にできない幸福感に満ちあふれているように思えて、感謝した。

あの日以降緑色のジープが決まって現れるようになった。偶然を装って、デービッドという将校は道端でヌヌムに会い、送っていこうと言うが、いつも断られては、人を搜索中の警察官よろしく決然と市場の周りを巡回するのだった。ヤサームとヌヤーングはじっとヌヌムの様子を見ていた。

「ほら、あの人から隠れた方がいいわよ！」と、デービッドが来る度に二人は言って笑った。「何よ！もっとオレンジがいるのかしら。一体いくつ食べるのよ！」

しかしデービッドを邪魔するものはなかった。ヌヌムをつけ回し、包围して、注意を引きつけた。彼には恐れるものではなく、ヌヌムも心のなかでは、この見知らぬ男は災いしか招かない未知の領域に自分を呼び込もうとしていることが分かっていた。もっと恐かったのは、あの見慣れた車がときには数日間も続けて現れないとき、動揺している自分だった。そしてまた出し抜けに、まるで魔法のように、日焼けして、ヌヌムに再会した喜びで一杯の彼が登場するのだった。彼に惹かれるのが分かった。理由は思いつかないけれど、ヌヌムは、彼のことを知っている、どんな種類の男なのか分かっているような気がした。互いの言葉すら分からないことを思えば、「そんなことがあり得るかしら」とヌヌムは戸惑いながら自問するのだった。デービッドは根気強くヌヌムの言語を習得しようとした。おかしいアクセントで土地の単語を使うものだから、ヌヌムとヌヤーングやヤサームもくすくす笑い出したが、ヌヌムの方とはいうと何も学ばず、彼の言葉の音声すら理解もままならない状態だった。

ある晩、数日姿を見せなかった後、新しい小さな映画館のそばを彼がただ通り過ぎるのをヌヌムは見つけた。高い道路から見下ろしながら、どうして彼の歩き方に気づくようになったのかと思うと、自分の気持ちにためらい、急いで駆けだした。彼女にはオレンジを売ったり、市場に行く必要すらなかった。敬われている村の長老の娘であり、引き返すべきなのだ。でも友人と市場に行くのが好きだったし、今は勉強したいとも結婚したいとも思っていなかった。道なりに急いで歩きながら、晩の空気を吸い込み、風が吹き始めると、体から汗が蒸発していくのを感じていた。それから車の音がして、彼だと分かった。

彼女はひとりで歩いていた。彼は彼女のそばで車を走らせた。車を止めると、身振りで乗るように伝えた。彼女がためらっているのを見ると、橋のところまでだけ、という合図を送った。彼女は乗り込んで座席

に着き、ジープがよろけて前方に投げ出されたときは死ぬ気がした。彼は手で彼女を押さえ、彼女は息を呑んだ。歩行者のそばを勢いよく通り過ぎると、驚いた顔がちらりと見えた。橋まで着くとデービッドは車を降り、彼女のためにドアを開けた。かすかに体が触れあった。彼はじっと無言で立っていて、彼女は揺れた心のまま振り向いた。彼は彼女の髪にそっと触れ、彼女の唇に指を置いた。そして微笑むと、反対側に回って車を出した。

その夏は、東に昇った太陽が世界をせばめてしまい、静かな午後と、長くゆっくりと燃えるような夜しかなかった。彼への恐れは消えて、彼女は少しの間一緒に歩くことを許した。ときおり橋のそばで彼は彼女と一緒に立っていた。こんな風に会い続けて、六ヶ月が過ぎた。ささいなことが二人には気になるようになった。ある日彼女は山の端から緑色の月が昇るのを見た。川は銀色に輝き、青白い道路の上で、自分たちの魂が用心深く、そして苦しみながら、高揚したり、疑いを抱いたりしながら回転するのを感じていた。こんな風に二人が一緒にいるところを多くの人が見ていた。

当時について手に入った大まかな説明では、デービッド・ファーガソン大尉はどうやら情報将校であり、ベンガル州から引き抜かれて、山岳地域で奉職し、新任政務官の任務を補助することになっていた。デービッド・サーヒブとして誰にも知られていた。およそ二十八才、率直な親しみやすい人物でヒンドゥスターニー語を流暢に話した。すでに山岳地方の多くの言語で相当の会話ができたことから、言語を学ぶコツを知っていたようだ。警察の少年たちとバレーボールをしたりした。村の子ども達が集まっているのを見つけるとジープを止め、広場にさっと乗り入れれば子ども達の歓声が上がった。それから子ども達に車を徹底的に調べさせてやる、ということがときどきあった。

彼はつかえながら、習ったばかりの単語に苦労しながらも、自分の父も辺境に住んでいたことがあり、広くインド中を旅し、東インド会社の蒸気船の時代にこの地域まで船で来たことだってあるのだとヌムムに話した。こうも言った、山の連なりの向こうでは今見ている川が曲がっ

て大きな水の輪を作り、轟音を立てて深い峡谷へ落ちていくのだが、同国人でその峡谷を見たのはたった数人だけだ。というのも、その峡谷はいつも厚い霧と水蒸気に覆い隠されているからだ。彼は両手で大きく弧を描くような動作をし、ヌヌムは耳を傾け、一言ひとことを理解しようと努めた。

どうして山のなかの小さな町、国のほかの地域からはかけ離れていて、知られていないようなところで、見知らぬ者同士二人が言葉では説明できないほどに惹かれあったのかは謎だった。文字のごく初歩的な知識と本を用いてもデービッドはヌヌムにとって全くの異邦人だったかもしれないが、深いところで彼女は彼の人生を理解していると感じていた。いつも川を指さしながら、彼が話してくれる海の大きな波を感じることができた。彼を通して向こう側の世界を見ていた。人であふれる町や通りが見えたと、飛行機が鳴り響く空の音も聞こえ、それが彼女に遠く離れた場所への思いを募らせたのだった。

ひそかに彼もまた、驚嘆して、彼女を見つめていた。どうしてこんな物静かな、見知らぬ女にここまで惹かれてしまうのだろう。若くて、学はないが、身振りと表情を使って、感情は内なる神が存在する証拠だということを伝えた女だった。このことを始終思案していた。あたかも二人は前世から再び一緒にやってきたかのようだった。一緒にいるとき、彼女が急に消えてしまうのではないかと恐れて、彼は微笑み、彼女の関心を引こうとするのだった。彼女に自分のことを知ってもらい、かつ恐れがられないように、細心の注意を払いながら、彼は自分についてあらいざらい説明した。それでもひとりになると、大きな川の音に耳を傾け、彼の人生の意味を探し求めているのは彼の方だと知り、そしてこの女を通して、大地の秘密や空の静けさ、そしてあの説明がつかない、太古からの悲しみの深さまでも、明らかにしつつあることに気づいた。その悲しみとはいつも彼が内に抱えているものだが、そこから再生が可能なのだと、今では彼も分かっていた。

デービッドの上司である政務官、すなわち部族民からの愛称ではミーゴムは、白いペンキを塗った木製のフェンスで道路から区切られたバン

ガローに住んでいた。デービッドは近くの、ただハイビスカスの植え込みだけで防御されている、小さい方のバンガローに住んでいた。白人の家というのは木でできていて、屋根はトタンの波板になっていて、蛇やヒルが届かないように、地面から1フィート上にコンクリートの柱の上に建っているものだった。どちらのバンガローにも川を見下ろせる窓がついていた。デービッドはいつも自分が見ている川の眺めをヌヌムに見せたくて、一度ここに連れてきたことがあった。彼女は植え込みの向こうをじっと見て、渦巻く緑色の川に目をこらしていた。日光が踊って、波立つ水面で反射していた、そして彼女はまるでその流れのなかで運命のまま動いて……どこへ向かうのだろう——それは誰にも分からないが、彼女は若く、大胆で、いろんなことに影響されやすいが、今自分の身に起こっていることは、後々値打ちのあることだと信じていた。

変化への切望は強風のようにやってきて、山の中腹からこだました。あまりに激しく吹くので、ヌヌムは生き残れるだろうかと思い始めた。彼女はパニック状態に陥り、必死に自問するのだった。何のために。そして誰のために。なぜ全てを変えたいと切望するのか。生き方から話す言葉、そして自分を縛る考えに至るまで。彼女は籠に入れられた動物のようにうずくまって風のを聞いていた。彼女の血のなかでどんどん大きな声で呼び、歌っている、あの強い風とひとつになれるなら、時間も場所も消し去ってもいいと思っていた。

ある日、ヌヌムはヤサームとヌヤングと一緒に村を出、デービッドは橋のそばで待っていた。計画は、友人二人が映画館に行き、その後ここで再びヌヌムと会い、揃って村に帰る、というものだった。ヌヌムはジープに乗り込み、デービッドはエンジンをかけた。ほんの短い距離も走らないうちに、牛を引いてしまった。ドスンと重い音がして、車は急カーブを切り、砂利の上を激しく滑ったが、再び道へ切り返した。彼女は腕を振り上げ、彼にしがみついた。彼はにやりと笑った。牛は大声で鳴くと、ゆっくり去って行った。ほっとしてヌヌムが笑うと、彼は手加減なしにスピードを上げた。軽い霧雨が地面を覆い、灰色の低く垂れ込んだ空を背に、山の緑色はさらに深くなっていった。彼は彼女の手を手

を伸ばした。彼女は手を引っ込めず、彼は片手を彼女の手にしたまま、ギアを変えた。今や二人とも笑い、町の境にある、フェンスのついた最後の家を走り抜けると、ヌヌムは抵抗しなかった。

川のそばにある、その小さなレストハウスは漆喰が剥がれかけ、木の床がきしむ、みすぼらしいものだった。川の上にせり出した突起した土地に建っていて、サーヒブたちが外回りの任務の際、そして時には川釣りのスポットとして使っていたが、たいていは空き家になっていた。野生のレモンの木が道から家を隠し、白い花の匂いが立ち込めていた。

管理人は驚いて、慌ててサーヒブを迎えに出て来て、息子に荷物を運び入れるように大声で言った。ヌヌムを見ると、驚いてむせたが、仰々しく鍵を使って、二部屋のうちひとつを開け、お茶を入れてくると言った。古い瓶の首に挿したキャンドルを持って、摺り足で引き出しまで行き、もう一本キャンドルを取り出した。そしてマッチ箱を探し始めた。

「手に持ってるのから点ければいいじゃないか」とデービッドは言った。「ほかに要るものはないから」

二人きりになると、聞こえるのは雨の音だけで、ほかはすべてかき消されていた。ヌヌムは初めて見る蚊帳を下ろして、笑った。また巻き上げて、上に戻した。デービッドは彼女を見つめていた、手足の動きと、それが薄暗がりのなかで光っているのを。そして、こみ上げてくる恐れと欲望に捕らわれた。彼女は何か言ったが、彼は答えなかった。

彼女は彼を見つめ、しゃべるのをやめた。彼が近づいて、ベッドの彼女のそばに座った。キャンドルの火が彼の顔と喉元にひらめき、彼女は動揺を気づかれないようにうつむいた。温かい液体が体中を巡り、気づかないうちに手を握られていた。彼女は手を引っ込めようとし、緊張を紛らわすために何か言おうとしたが、一言も出てこなかった。力が抜け、彼の口が自分の口元で息をしている。彼女は顔を上げ、目を閉じた。デービッドは子どものように震え、きつく抱きしめたせいで彼女の体は浮き上がりそうになった。彼の震えを彼女は分け合った。彼は彼女の口を自分の口で開けながら、容赦なく探り、彼女のためらいをかき消そうとし、彼女の頭を引き戻そうとすると、彼女は喘ぎ声をあげた。

「だめだ、だめだ……」彼は彼女を失うことを恐れてつぶやき、固く彼女の手を握りしめて、痣になった。

こんな類いの愛はヌヌムには思いもよらなかった。こんなにも必死に自分をさらけ出す、この男に触れられて、戦慄を覚えた。この人は何者なの。どうしてこんな風になってしまったの。彼の欲望は彼女に火を点けた。

彼の口は引き離されると、彼女の喉を滑るように降りていった。彼の手が胸に触れ、露わにしていく動きを感じた。深いところからほとぼしるものに満たされて、彼女は彼を背に弓なりにのけぞりながら、硬くなった乳首を包み込んでいる彼の手押しつけた。もはや手遅れだった。彼が彼女の体を横たえたとき、彼の肩に顔を隠そうとした。抵抗できなかったし、そのつもりもなかった。彼が自分と同じように無力なことが不思議に思えた。彼女を覆うものが開かれ、外れ落ち、その裸身に彼はうなり声を発した。近づくと彼女の湿った髪が彼の口元を通り過ぎ、彼は彼女の手首を押さえつけ、優しさと激情に苛まれながら、彼女のなかに入ってしまった。彼女に優しくしたかったし、ゆっくりと進めたかった、そして今度は彼女に自分を愛させるほどに強まっていく痛みを感じたかった。しかし、彼女は激しくかぶりを振り、すすり泣いた。彼は彼女の顔を包み込み、自分の方を見させた。視線がしっかり合ったまま、彼は彼女のなかへと沈み込んだ。彼女の体を抱き起こしたとき、彼女を傷つけた。肉を裂き、罰し、愛し、消耗させ、ついに彼女は彼の名前を叫び、目に涙を浮かべながら、視線を落とし、その顔は震えて崩れ落ちた。

なんて甘美な！なんて激しく打ちつけるのか！彼は体を起こして、彼女の肌の白さと下腹部の傾斜を見下ろし、二人がつながっている黒く盛り上がったところに至った。彼の体は激しく揺れ、そして降伏した。長い間、彼は横たわったままびくともせず、彼女の抱擁に頭を埋めていた。彼は自分の気持ちが恐くなり、いつまでもこんな風が続くのだろうか、もう二度とひとりぼっちにはならないのだろうか、と考えた。彼はもう一度彼女を見ようとわずかに向きを変えた。彼女は何か囁き、ぴっ

たりと身を寄せた。そうして長い間、二人は黙って、一緒に身を横たえていた。

父の家で、ヌヌムは木の柱に留められた小さな鏡をのぞき込んだ。顔はすっきりしていた。目は彼女を見つめ返し、大きく、光沢があった。口はうぶで飾り気もなかったが、今もあの塩味と打ち身を感じているし、血流で唇が膨らむと、なにか命ある、手に触れることのできる川の生物のような性質が備わるのを感じた。その生物は、動いたり、滑ったり、火から発する触手で花が咲いたようになるものだ。体は変わってしまった。彼女は完全なものになり、恐れは感じなかった。生き生きとして、力にあふれ、与え与えられたいという欲望があふれているのを感じた。

スキャンダルが明らかになると、村長のソーゴングは娘には何も言わなかった。代わりに白人の家を燃やし尽くし、この土地から追い出すと脅した。もともとドゥヤーングの氏族が白人たちに与えたのは、ピゴに定住するためのたった 1 平方マイルの土地についての合意の書面だった、ということを思い出した。今や彼らは全ての村々を支配しようとしている。ソーゴングは彼らを追い払おう、というのだ。何人かの友人に相談し、友人たちはこの未曾有の災難に際し、彼を助けようとした。村の娘と白人だなんて！考えられない！しかし、彼らには女が男を愛することを止められない。それは誰もが分かっていたし、そのうえヌヌムは手強い相手だ。好きにすればいいとかまをかけたり、反対に妨げようとすれば、彼女は何でもしかねなかった。母親はヌヌムが生まれた日を呪い、ソーゴングの飲んだくれを呪い、しまいには皆が互いに呪い合うので、騒動の原因すら少し忘れられかけたほどだった。

ある日ラークトの父が、年老いたソーゴングが赤いコートと長い杖を持って、ミーゴムの事務所に駆け込んでいくのを見かけた。年長のサーヒブは親切で、この国の多くの部族に対応した長年の経験を持つ人物だった。彼は当地の言葉を話し、直ちにソーゴングを呼びにやった。

「さあさあ、お入りください。やあ、ソーゴング、元気ですか。お茶でもいかがかな」

ラクトの父は、ソーゴングとサーヒブが長い間席をともにしていたと言った。何を話しているのか聞こうとしたが、開けっぴなしのドアにかかっていた緑色のカーテンは短く、薄っぺらだったので、近づきすぎると見つかるかもしれない恐れがあった。言えることは、ソーゴングは出てきたとき、とても物思いに沈んでいるように見えた、ということだけだ。多分二人は生活や愛や世の習わしについて話し合ったのだろう――誰にも分からないことだが。二人とも年を取っているし、父親でもあるから。

その会談の後、ソーゴングはその件全般についてさらに話すことはなかったが、自分自身の家を避けるようになり、たくさんいる友人の家にいて自分の家を空ける時間が次第に長くなっていった。詳細に話したがる者はいなかったし、じきに人々は自分の仕事に専念して、あのことは気にしていないふりをした。ただ、年長のサーヒブだけが、ある日部下にその話題を切り出した。

「デービッド大尉」と彼は大きな、はっきりした声で言った。「ある噂話があって、その……君についてなのだが。部族の女と親しくなったという」

デービッドが答えないと、彼は続けた。「私は平和主義でね。ここの人たちはいい人だよ。愛とか情事にだって反対はしないよ。だけどよく聞いてくれ、自分の振る舞いが任務をおびやかしているとは思わないか」

なおもデービッドは何も言わなかった。

ついに年長の男は言った。「愛しているのだな」

「はい」

沈黙があった。そしてサーヒブは言った。「責任を取って結婚するつもりなのか」

「はい、そうであります！私はそのつもりですが……向こうはそんな気はないようです。もしもここを離れたら、一緒には来てくれないと思う次第であります！」

「おや、そうなのか。ふーむ……」と上司は咳込み、若い男をじっと見た。視線が和らいだ。「まあ、ここ人間は変わってるからな、この

民族は。そうだ、簡単に移住はしないだろう、あえて言っておこう。まあ、用心することだよ」

デービッドが出て行ってから、サーヒブは長い間デスクにいた。目の前に置かれた書類を鉛筆で叩いた。こんなに長い年月がこれほど早く過ぎたことが不思議に思えた。1932 年からこの山々で任務に就き、もう 1943 年になっている。母国は激戦に巻き込まれており、その影響は遠く及んでいる。恐らくもう本当に時間切れなのだと、悔やみながら彼は考えた。どれほどの調査の任務を率い、未知の土地の地図を作ったことか。それがここに至って、長い仕事の終わりに来て、若者のおかしな心のありかたに戸惑っているとはな！参ったことだ！もうイギリスへ戻る船旅に出ようかというときに、愛などととち狂った任務のために正反対に出帆しようという役人がここにいるとは。彼はその若者が気に入ってはいたが、正気の沙汰ではない。デービッドの配属命令が出されていて、もしハットトリックでも決めない限り、さっさと立ち去らなければいけないことを彼は知っていた。

一年も経たないうちに、白人のサーヒブたちが間もなく出て行くという話が広まった。国のほかのところにいる友人や家族はすでに撤退しはじめていた。デービッド将校も、年長のサーヒブより前に立ち去ることになっていた。ヌヌムに最初にこのことを教えたのはヤサームとヌヤーングだった。ヌヌムの落ち着きように二人は驚いた。

「ええ、知ってたわ」とヌヌムは言った。「もうすぐあの人は行ってしまふの。でも心配しないで、私は行かないから！一緒に行けるはずないでしょ」

それでヤサームとヌヤーングは息が楽になった。ヌヌムが村から行ってしまふなんて、想像できなかった。二人は何度もこのことを話し合い、デービッドがヌヌムを連れ去っていったら、もう二度と会えなくなる、そう考えただけで泣きそうになっていた。もっとももう皆大人の女なのだし、ヌヌムは落ち着いて見せることで自分の身を守っているに過ぎないのだということを二人とも気づいているのは、承知の上だった。

それでもこのことは、友だちの間であっても話し合うことのできないものだった。

デービッドは、青白い空が山々のくっきりした輪郭を際立たせる朝早くに出発した。まだ暗い頃にヌヌムは彼の元へやってきていた。彼の車は燃料貯蔵庫から戻っておらず、家には二人きりだった。彼女は彼の顔を黙ってじっと見た。彼も不安気に待っていた。体の脇で大きな両手を握りしめ、全体重を支えているかのように指の関節が椅子に押しつけられていた。愛は彼らにとっては非常に困難な目標に思えた。彼女は彼の混乱を感じ取り、懇願と情熱を込めた目で彼が見つめ返したとき、自分の目を隠した。

「ヌヌム！ヌヌム……」まるで自分が弱くなるのを恐れて、泣くように彼の言葉はこぼれ落ちた。彼女は素早く立ち上がると、彼が話すのを止めるために顔の上に両手を置いた。彼は彼女を抱き寄せた。彼女は理解できない言葉を囁いた。彼は泣いた。彼女はさらに強く彼を抱きしめた。そして、彼に分かることを願って、ゆっくりと話した。彼の勝ち誇った姿を見たい、彼には勇気を持ってほしい、と彼女は言った。彼女が彼を愛している限り彼にはどんな害も及ばないこと、そして彼女の愛は光の帯のように山の頂上を越えて彼についていくのだ、ということを知ってほしかった。

そして、彼にあげる言葉はもうなかった。家は空っぽで静かだった。ただ、ドアのすぐ外に控えていて、足をこすりながら、彼を渡り船まで送り届けようと待っている男たちを除いては。

彼はパニック状態で立ち去った。古いジープが出発し、走って行く間、前列の席でザック袋を抱きかかえ、どこも見えていない、若い役人にすぎなかった。

ほこりの小さなキノコ雲が円形のマーケットを通り過ぎるのを見たとき初めて、ヌヌムは失恋したことに気づいた。両手で顔を覆い、泣いた。「ああ！あの人は行ってしまった！もう二度と会えない！どうすればいいの。どうすればいいのよ！」

デービッドとヌヌムが将来のために何か一緒に計画していたかどうかは明らかではない。あるいは、立ち去る前に彼が彼女の父親に何を言ったかは。誰に聞いても、デービッドはその老人とはいつも仲がよく、その土地や周辺の村々について何か調べなければならないことがあると、彼の元を何度も訪れていたそうだ。崩れた言葉と正確な身振りで、意思の疎通を行いながら。

イギリス人の手から統治権を奪い取ろうと奮闘する間、国全体が変化していた。年長のミーゴムもまもなく国を去ろうというので、新しい役人が到着し、村々の全ての長がひっきりなしの到着と出発で忙しくしていた。この変化の時期に、ヌヌムは昔からの暮らしに戻り、黙々と家の雑事を引き継いでいた。母は無言で彼女の悲しみを分け合った。父がうまい冗談を言おうと、下手な努力を重ねていることに心が動いた。最近酒量が増え、目つきは老けて疲れたものだった。彼女には言いたいことはたくさんあったが、やさしさに魂が縮こまり、言う代わりに目立たないでいようとした。高嶺の花のふりをしていたのは、痛みと傷を恐れることを克服したからだった。友人のヌヤーングが嫁ぎ、そしてある日男の赤ちゃんを産んだとき、彼女は祝福した。ヤサームも婚約し、そうして人生は続いていった。東方の戦争は終わり、ホクソとラークトの父親も帰ってきた。冒険物語と、いかに白人たちと協力して、日本人軍が山を登り、村々に侵入するのを阻止したかについての話をいっぱい携えて。男と女は火のそばで手足を伸ばして、希望やら恐怖やらについてしゃべっていた。

夜には村の上空は星で一杯になった。そして毎夜ヌヌムは自分に言うのだった。「愛で死ぬ人なんていないわ。あの人のこと愛してたけど、今はひとりで十分だわ」

使用テキスト

Dhai, Mamang 2006. The Legends of Pensam. New Delhi: Penguin Books.



『ペンサムの伝説』は、アルナーチャル・プラデーシュ州イーターナガルを拠点とする作家ママーング・ダイ(1957-)がアーディ族を題材にした短編集である。今号では「村の娘たち」と題されたパートの前半を訳出した。タイトルの示すとおり、厳しい自然環境や伝統的な価値観のなかで、女性として生まれ、生き、死ぬことが率直に描かれている。しかしそれは限定された、特異なものというより、私たちにも共感できる部分が多々あるのではないだろうか。そしてその理由は、作家の温かな眼差、繊細な描写にあるのではないかということが、翻訳作業を通して感じたことだった。

最後になりましたが、日本語への翻訳を楽しみにしてくださり、訳者からの質問にいつもていねいに答えて下さる、ママーング・ダイ氏に心より感謝します。

